

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 5 日現在

機関番号：32303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370725

研究課題名(和文) 英語授業で求められる英語教師の異文化能力に関する研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study on Enhancing Learners' Intercultural Competence in English Language Classroom

研究代表者

中山 夏恵 (Nakayama, Natsue)

共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・准教授

研究者番号：50406287

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：英語授業を通じ生徒の異文化間能力(IC)を促す上で教師に求められる授業力の可視化を目指して研究を始めた。国内外のICに関する枠組みの研究を通じ、その概念や授業で扱えるIC要素の抽出を試みた。加えて、日本のIC指導の現状理解のため、教員の意識調査(JACET教育問題研究会, 2012)の再分析や、中学校検定教科書に出現するIC要素の分析を行った。結果、異文化間教育の実践において海外経験が有用であることや、検定教科書が表層文化中心の構成であることが判明した。一方、優れた実践の収集・分析の結果、使用する教材よりも教師の異文化授業力の重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to examine the cultural descriptors of the J-POSTL (or the Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages: JACET SIG on English Language Education, 2014) and to contextualize the pedagogical competences needed to develop students' intercultural competence (IC) in class. For the first stage, we have studied existing IC frameworks to understand and extract IC factors that could be dealt with in Japanese EFL class. For the second stage, to understand IC lessons in Japan, we have re-analyzed the J-POSTL survey (JACET SIG, 2012) to understand teachers' perception towards teaching IC lessons, and found out the importance of overseas training. Then, we analyzed government-approved junior high school textbooks and found out that they mainly dealt with surface culture. Also, through classroom observation, we found out that teachers' IC is more important than types of textbooks they use.

研究分野：異文化アプローチによる言語教育

キーワード：異文化間能力 英語教師の異文化授業力 異文化指導法 英語検定教科書 『言語教師のポートフォリオ(J-POSTL)』

1. 研究開始当初の背景

本科研のメンバーの多くは、JACET 教育問題研究会に所属し、平素より、協働して研究活動を進めていた。その研究活動の中で、「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR: 2001)」を源泉とする『ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ (EPOSTL)』を日本の文脈に合わせて翻案化した (J-POSTL: JACET 教育問題研究会, 2014)。その過程で、諸外国の外国語教育関連の政策や文献において異文化間能力(IC)が重要な観点として扱われていることを認識した。例えば、欧州評議会による CEFR(2001)、CEFR を文化面から補完する文書とされる「言語と文化の複元的アプローチ参照枠 (CARAP-FREPA: Candelier et al., 2012)」や、NZ で進展する異文化間コミュニケーション言語教育 (iCLT: Newton et al., 2010) の 6 原則などがその例として挙げられよう。

翻って日本においても多文化環境は増えつつあり、このような社会で生きていく生徒にとって、IC を備えることは必要不可欠となる。しかし、その重要性は広く認識されている一方で、それを授業にどのように取り入れるべきか、その方法については、未だ明らかにされていない部分が多く、実際の授業においてはほとんど反映されていない状況が観察された。また、2012 年に中高の現職英語教員対象に J-POSTL 調査を実施した結果、いわゆる言語機能面の指導に対する認識と比較し、多くの教員が異文化指導に関する項目に対する自信がないことが明らかになった。

そこで、欧州や NZ・オーストラリアを中心とした諸外国においてこの異文化間能力の概念がどのように定義されているか、授業実践に関わる異文化教育力の指標はどのような構成で、それはいかに実践に移されているか調査することとした。そして、日本における異文化指導の目標や現状と対応することで、日本の英語授業において異文化指導を行う際、教師に求められる能力を可視化することを目的に研究を始めた。

2. 研究の目的

日本における英語授業で異文化を教えるために必要な英語教師の能力を可視化することを目的とする。そのための具体的な方法としては、JACET 教育問題研究会が開発中の「言語教師のためのポートフォリオ (J-POSTL)」の異文化間教育に関する記述文に注目し、これを日本における英語教育環境に沿うよう文脈化することで行う。また、作成された枠組みを参考に、日本の英語授業で活用できる指導法を検討する。

3. 研究の方法

まず基礎研究として、欧州や NZ・豪国を中心とした諸外国において異文化間能力(IC)の概念がどのように定義されているか、授業

実践に関わる異文化間教育力の指標はどのような構成になっており、実践に移されているかについて調査することで、海外における異文化間教育に関する基準を理解すると共に、日本の英語教育への示唆を探った。具体的には、以下の 2 点を中心に行った。

1. 海外の異文化間能力に関する指標の文献調査

2. NZ への訪問調査 (異文化間教育の原則の開発者や教育関係者へのインタビュー及び授業見学)

また、日本の英語教育環境文脈に沿った枠組みの作成及び、指導法を検討するため、日本の異文化指導の実態を調査した。具体的には、以下の 3 点を中心に行った。

1. 現職英語教員の異文化指導に対する意識調査。

2. 中学校における検定教科書から観察される異文化要素の分析

3. 先進的な試みを行っている先生方への聞き取り調査及び授業見学

得られた結果を基に、異文化授業力の枠組みの文脈化、及び指導法の提案を行った。

4. 研究成果

(1) 25 年度

海外における異文化間教育に関する基準の理解(文献研究)

Byram(1997)の「異文化間能力モデル」を反映し、授業実践を念頭に開発された 2 種の文書(「異文化間コミュニケーション言語教育」の 6 原則(iCLT: Newton et al., 2010)及び、「言語と文化の複元的アプローチ参照枠 (CARAP-FREPA: Candelier et al., 2012) を J-POSTL の記述文に対照した。結果、J-POSTL に含まれる課題(記述文にある概念や用語が難解であることや、生徒に伸ばすべき能力が明示されていない等)の検討に、iCLT と CARAP は活用できることが明らかになった。

海外における異文化間教育に関する基準の理解(NZ 訪問調査)

NZ で進展する異文化間コミュニケーション言語教育(iCLT)の原則が授業実践、教職履修学生の指導や、教員研修においてどのように活用されているかを調査するため、NZ へ訪問し、iCLT の主要著者である Jonathan Newton 氏や、原則を基に授業へ応用している教員(高校や大学)の授業見学・聞き取り調査を行なった。調査結果は、研究ノート(「ニュージーランド訪問調査の報告」)にまとめると共に、日豪 NZ 教育文化学会(JANTA)・中山夏恵科研 共催異文化間コミュニケーション・スタイル講演会にて報告した。

講演会の主催

上述の通り、コミュニケーション・スタイル講演会を開催した。コミュニケーション・スタイルが国ごとにどのように変化するか、主

に英語圏と日本との対比の上で、村田泰美先生(名城大学)にご講演頂いた。

日本の英語教員の意識調査

日本の現職教員の異文化指導に対する意識と実践の現状を理解するため、全国調査(JACET教育問題研究会, 2012)の結果の再分析を行った。結果、以下の3点が明らかになった(久村, 2014)。

- ・海外経験のある教師はない教師より異文化間教育に対する自信がある。
- ・海外経験のある教師の中で、教育歴11年以上の教師は5年未満の教師より有意に自信がある。
- ・海外経験のない教師は、たとえ教育歴が長くとも、異文化間教育力は有意に向上しない。

つまり、これらの結果から、異文化間教育の実践において海外経験は有用であり、教員養成においても異文化接触経験を必須化する必要性が示唆された。この結果は論文「英語教師の海外経験と異文化間教育への自信 - 全国調査分析結果からの示唆 - 」(英語版: “Overseas Experience and Confidence in Teaching Culture among English Language Teachers in Japan”)にまとめた。

(2) 26年度

異文化間能力を促す授業の分析

3つの異文化指導の実践例(中高)を収集し、それがどのような異文化間能力を涵養しているかをCARAP-FREPAに対照することで分析した。その結果これらの授業には、以下のような共通点(中山, 2016)が浮かび上がった。

- ・教師が、「国際共通語としての英語」という視点を持ち、授業に取り組んでいる。
- ・1度切りの試みではなく、継続的に文化指導に取り組んでいる。
- ・授業の中で、複数の異なる視点に触れる機会を設けている。
- ・「比較」したり「探索」する活動を授業に取り入れている。

これらの結果は、2度のシンポジウム(西山教行科研主催京都国際研究者集会及び、JACET教育問題研究会主催言語教育エキスポ2014)にて報告した。

中学校検定教科書調査

中学校の英語教科書を網羅的に調査し、日本の英語授業を通じて生徒に涵養される「異文化間能力」の総体を把握しようと試みた。そのため、教科書で扱われているトピックやアクティビティをCARAP-FREPAや、Byram (1997)による異文化間能力の構成要素(主に「知識」「態度」「技術」)に対照させた。その結果、異文化に対する知識や異文化に興味関心を持たせる内容は教科書の半数以上の頁において見られた反面、深層レベルの異文化間能力を扱う項目はほとんど観察されなかった。ここから、授業を通して学

習者の異文化間能力をより効果的に育成するためには、異文化間能力についてより明示的に扱った教材開発や教員の指導力の向上のための研修が必要であることが浮かび上がった。この結果は、論文「中学校英語検定教科書に見られる異文化間コミュニケーション能力 - 『言語と文化の複元的アプローチのための参照枠』を用いた分析を通して - 」(英語版: Can intercultural competence be developed through textbooks? An analysis of English textbooks for Japanese junior high school students)にまとめた。

(3) 27年度

J-POSTLにおける異文化要素の文脈化及び指導法の検討

J-POSTLの文化の項目で扱われている主要な異文化要素についての文脈化をCARAP-FREPAやCEFRなどの文献を基に解釈を行ったり、検定教科書調査の結果(中山・栗原, 2015)を利用し、その異文化要素が促されるページを利用することで行った。その内容は「日本の文脈に沿った異文化授業の検討」に纏め、最終年度に作成した研究成果報告書(桐文社, 2016)に収録した。この論文では、日本において異文化指導を検討する際に、考慮すべき要因を挙げ、J-POSTLを含む、複数の異文化教育実践に関わる枠組みの検討を通じ、日本の文脈に合った異文化指導の計画法について提案を行った。

指導法の普及

2014年に引き続き、優れた実践を行う先生方に聞き取り調査を行い、異文化教育の実践に対する理解を更に深めると共に、実際の指導法の普及のため、ワークショップも2度実施した(平成27年度高校英語科ミドルリーダー養成研修特別講義及び、言語教育エキスポ2016)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

(1) Natsue Nakayama & Fumiko Kurihara (2015) ‘Can intercultural competence be developed through textbooks? An analysis of English textbooks for Japanese junior high school students’, “Language Teacher Education Vol.2, No.2”, JACETSIG-ELE Journal. (査読有) URL: http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/VO_L2NO2.pdf

(2) 中山夏恵・栗原文子(2015)「中学校英語検定教科書に見られる異文化間コミュニケーション能力 - 『言語と文化の複元的アプローチのための参照枠』を用いた分析を通して - 」, 『Language Teacher Education Vol.2,

No. 1, JACETSIG-ELE Journal』.(査読有)
URL:
<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/VO L2NO1.pdf>

(3) Ken Hisamura (2014) 'Overseas Experience and Confidence in Teaching Culture among English Language Teachers in Japan', "Language Teacher Education Vol.1, No.2", JACETSIG-ELE Journal. (査読有) URL: <http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/VO L1NO2.pdf>

(4) 久村研(2014)「英語教師の海外経験と異文化間教育への自信 - 全国調査分析結果からの示唆 - 」『Language Teacher Education Vol. 1, No. 1, JACETSIG-ELE Journal』.(査読有)
URL:
<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/VO L1NO1.pdf>

(5) 中山夏恵・栗原文子・岡戸浩子, 「ニュージーランド訪問調査の報告」『日豪NZ教育文化学会論集(JANTA Bulletin) 第 11 号』, (2014).(査読無)

〔学会発表〕(計 16 件)

2. 学会発表

(1) (ワークショップ) 中山夏恵, 清田洋一「J-POSTL を活用した異文化理解教育の実践」言語教育エキスポ 2016, 2016 年 3 月 6 日(日), 早稲田大学 11 号館 4 階(東京都).

(2) Fumiko Kurihara "How "culture" and "intercultural learning" are treated in English textbooks in Japan", 中山夏恵科研・JACET 教育問題研究会共催 A Roundtable on Teaching Intercultural Competence in Practice, 2016 年 2 月 25 日, 早稲田大学 14 号館 604 教室(東京都).

(3) Natsue Nakayama & Yoichi Kiyota "How to plan an IC lesson by making use of the J-POSTL descriptors", 中山夏恵科研・JACET 教育問題研究会共催 A Roundtable on Teaching Intercultural Competence in Practice, 2016 年 2 月 25 日, 早稲田大学 14 号館 604 教室(東京都).

(4) (招待講演) Natsue Nakayama "Teaching English in the globalized world: Issues related to enhancing students' intercultural communicative competence in Japan", 平成 27 年度高校英語科モデルリーダー養成研修特別講義, 2015 年 11 月 30 日, 群馬県総合教育センター(群馬県).

(5) (招待講演) Natsue Nakayama

"Teaching English in the globalized world: Enhancing students' intercultural competence in the Japanese educational context", 2015 ALT and JTE Skill Development Conference, 2015 年 10 月 29 日, 群馬県総合教育センター(群馬県).

(6) Natsue Nakayama & Fumiko Kurihara "Key Concepts for Intercultural Development and Their Treatment in Junior High School Textbooks in Japan", the JACET 54th International Convention, 2015 年 8 月 30 日, 鹿児島大学(鹿児島県).

(7) (招待講演) 中山夏恵・栗原文子 「グローバル化時代の英語教育 - 異文化間コミュニケーション能力育成の意義と課題」, JACET 関東支部大会, 2015 年 7 月 12 日, 青山学院大学(東京都).

(8) 久村研, 印田佐知子, 醍醐路子, 栗原文子, 中山夏恵 「中学英語検定教科書から見られる異文化指導の現状と課題」, 言語教育エキスポ 2015, 2015 年 3 月 15 日, 早稲田大学 11 号館(東京都).

(9) (招待講演) 中山夏恵・栗原文子 「グローバル時代に求められる異文化間能力 - 英語授業における現状と課題」, 2014 年度青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会(第 5 回), 2015 年 1 月 10 日(土), 青山学院大学総研ビル(14 号館)11 階第 19 会議室.(東京都).

(10) 久村研 「英語教師の海外経験と異文化間教育力の自信の現状」日豪 NZ 教育文化学会(JANTA), 中山科研(共催)異文化間言語教育研究発表会, 2014 年 9 月 13 日, 中央大学(後樂園キャンパス)6 号館 6701(東京都).

(11) 中山夏恵・栗原文子 「異文化間コミュニケーション能力の育成と検定教科書」, 中山科研(共催)異文化間言語教育研究発表会, 2014 年 9 月 13 日, 中央大学(後樂園キャンパス)6 号館 6701(東京都).

(12) 醍醐路子 「中学校における, 人権尊重を基盤とした異文化間コミュニケーション能力の育成」, 中山科研(共催)異文化間言語教育研究発表会, 2014 年 9 月 13 日, 中央大学(後樂園キャンパス)6 号館 6701(東京都).

(13) 印田佐知子(立教大学) 「中学英語検定教科書における異文化コミュニケーション能力育成の課題」, 中山科研(共催)異文化間言語教育研究発表会, 2014 年 9 月 13 日, 中央大学(後樂園キャンパス)6 号館 6701(東京都).

(14) 中山夏恵 , 栗原文子 , “How Intercultural Competence of Japanese Junior High School Students Can Be Enhanced: Textbook Analysis and Its Implications” (中学検定教科書から探る異文化間コミュニケーション能力の育成と指導), 大学英語教育学会 (JACET) 国際大会, 2014年8月28日, 広島市立大学(広島県).

(15) Natsue Nakayama & Fumiko Kurihara, “An analysis of cultural descriptors in J-POSTL (Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages”, AILA (World Congress of Applied Linguistics) World Congress 2014, 2014年8月14日, Brisbane Convention & Exhibition Centre, Australia.

(16) (シンポジウム) 中山夏恵・栗原文子, 「異文化理解を促す英語授業の現状と可能性」, 西山教行科研主催京都国際研究者集会 2014, 2014年4月6日, 京都大学大学院人間・環境学研究科棟総合館共南11 講義室(京都府).

(17) (シンポジウム) 中山夏恵・栗原文子・吉浦潤次・齋藤 理一郎, 「異文化理解教育は学習者をどのように動機づけるか」, JACET 教育問題研究会主催言語教育エキスポ 2014, 2014年3月9日, 早稲田大学 11号館(東京都).

(18) (講演) 村田 泰美(名城大学) 「男性初対面会話のターンと発話量 - 日・英・米・豪の母語会話および異文化間会話をデータとして - 」日豪 NZ 教育文化学会(JANTA)・中山夏恵科研 共催異文化間コミュニケーション・スタイル講演会, 2013年9月14日, 早稲田大学 11号館 4階第4 会議室(東京都).

(19) (事例報告) Greg Winder (明星大学) “Inter-cultural Communications”, 日豪 NZ 教育文化学会(JANTA)・中山夏恵科研 共催異文化間コミュニケーション・スタイル講演会, 2013年9月14日, 早稲田大学 11号館 4階第4 会議室(東京都).

(20) 中山夏恵・栗原文子・岡戸浩子, 「NZ 訪問調査報告」, 日豪 NZ 教育文化学会(JANTA)・中山夏恵科研 共催異文化間コミュニケーション・スタイル講演会, 2013年9月14日, 早稲田大学 11号館 4階第4 会議室(東京都).

(21) 中山夏恵・栗原文子, 「英語教員に求められる異文化授業力に関する一考-J-POTL 調査の結果を中心に」, 関東甲信越英語教育学会第37回長野研究大会, 2013年8月17日, 松本歯科大学(長野県).

(22) 久村研・栗原文子, 「英語教師の異文化

授業力の実態と課題」, 全国英語教育学会北海道大会, 2013年8月10日, 北星学園大学.

〔図書〕(計1件)

(1) 中山夏恵(編), (2016)「平成 25, 26, 27年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 英語授業で求められる英語教師の異文化能力に関する研究」, 桐文社.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山 夏恵 (NAKAYAMA, Natsue)
共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・准教授
研究者番号: 50406287

(2) 研究分担者

栗原 文子 (KURIHARA, Fumiko)
中央大学・商学部・教授
研究者番号: 60318920

(3) 連携研究者

久村 研 (HISAMURA, Ken)
田園調布学園大学・子ども未来学部・教授
研究者番号: 30300007

(4) 連携研究者

岡戸 浩子 (OKADO, Hiroko)
名城大学・人間学部・教授
研究者番号: 70352896

(5) 連携研究者

大崎 さつき (OSAKI, Satsuki)
創価大学・文学部・准教授
研究者番号: 70546366